

Jeff Rider,

*God's Scribe: The Historiographical  
Art of Gilbert of Brugs.*

青谷 秀紀

I

一二二七年三月二日に起こったフランドル伯シャルルの暗殺は、西洋中世史上よく知られた事件である。これは、伯の厳格な統治により不自由身分の出自が暴露された伯領の最有力家系エランバルド一族により引き起こされたものである。事件はその後、伯領の混乱とフランス王の推挙による新伯ギョーム・クリトの登場及び事態の一时的沈静化、翌年にかけてのギョームの統治に対する諸都市の反乱と対抗伯ティエリ・ダルザスの登場、そして内乱とギョームの死及びティエリの伯位承認による内乱の終結へと通じる。これら一連の経過を克明に綴った史料にガルベール・ド・ブリユージュ著『シャルル善良伯の暗殺』(以下『暗殺』)が存在するが、これもまた西洋中世史上最重要史料としてよく知られるものである。当時の歴史叙述に類をみない日記形式を採ったこの史料は、事件の現場であるブリユージュで伯の役人として働いていたガルベールが自ら目撃した出来事や直接の目撃者からの伝聞をもとに記したものである。その特異な形式に詰め込まれた情報量

は驚くべきものであり、これまで歴史学のあらゆる分野でこの史料は読み解かれ、活用されてきた。なかでも、近年文化的な文脈で議論されることが多いようにも思われるが、本書もそうした流れの上に位置し、それらを総括するものであるといえよう。そして、おそらくガルベールを扱った単著の本格的な研究書としては初のものであるという点でも本書の価値は高い。著者のJ・ライダーは、一九世紀末以来使用されてきたH・ピレンヌ校訂版に代わるべく一九九四年に『暗殺』の新版を出版した校訂者でもあるが、その史料刊行の際の写本研究により培われた綿密な読みが本書の基幹を成している。以下、その内容を紹介し、次いで評者の見解を述べ本書の特徴と意義を見定めてみたい。

II

はじめに「Introduction: An Open Book」では、ガルベールと『暗殺』に対するこれまでの評価が振り返られる。中世においてはほぼ忘れ去られたのとは対照的に近世に入ってその情報の量と正確さで高く評価されることになる『暗殺』だが、近代歴史学においてこの史料とその著者ガルベールに対する評価には二つの対極的傾向が存在する。まず、ガルベールは民衆のかつ素朴な記録者で、そのいかなる主観・学識・思索によっても『暗殺』は歪められておらず、それゆえにわれわれはこの「透明な」史料を通じて一二世紀フランドル社会を直接観察することができるという見解がある。これは、一九世紀末の『暗殺』校訂者ピレンヌに始まるものである。次いで、ガルベールが主体性を確立した個人主義的人物であり、法知識と政治思想を備えた有能な叙述者であると

する見解が二〇世紀後半に現れる。こうした二つの見解が現在まで並存しているが、後者によるガルベールの人物像や学識をめぐる復権の試みにもかかわらず「暗殺」のテクスト自体は未完成と考えられ、一つの作品として評価されることはなかった。ライダーはその上で、「暗殺」が素朴な日記ではなく、ガルベールが歴史的コンセプトを反映させるため考案した日記形式の歴史叙述であること、そしてそこには綿密な改訂・編集が施されており、その知的な工夫を伴う叙述が近世以降の成功に繋がったことを以下の議論で示そうとするのである。

第一章「Ego Galbertus」では、まず暗殺とその後の政治史が概観された後、ガルベール自身の叙述や文書史料などから作者ガルベールの経歴や性質が考察される。この問題についてはデータも乏しく推測的にならざるをえない。確認できるのは、彼が基礎的な教育を受けた聖職者であったこと、ブリュージュのシャテルニーで伯の財務行政に携わる宮廷の周縁的なメンバーであったこと、サン・ドナティアン教会参事会においても周縁的なメンバーであったこと、市民に共感的でありつつも職務の立場から一般都市民からは区別される立場であったことぐらいである。しかし、この各所で周縁的でありつつどこにも出入りしうる立場にあることが、ガルベールの限定されることのない視野を創り出したのである。

続く第二章「In the Midst of Such a Great Tumult」では、ガルベールの作業過程を綿密にたどることで作品の主観性と構築性が明らかにされる。周囲の混乱した出来事を記憶し、理解し、説明しようとノートを取りはじめたガルベールは、まずオーラルな

史料や文書史料から取材した情報を当時のメモ帳である蠟板タブレットに記していたことが彼自身の証言でわかっている。ガルベールは、まず小さな蠟板に省略されたラテン語で、時には時系列を無視して重要な出来事の要点だけを記した。そして、それらの情報を蠟板から羊皮紙に移す際、毎日の大量の情報を処理すべく、財務記録を行う職務上の流儀もあつて日記形式を採用し、それらの情報を叙述へ再構成したのである。さらに、随所に見られる追加を示すキーワードから、ガルベールは蠟板から羊皮紙への情報の移行後、再び情報が追加された蠟板から羊皮紙の余白に情報を追加し、その後の再読の際さらに自身の見解から余白や羊皮紙断片に情報を追加し、最後にその全体を統合すべく再コピーしたことがわかる。このように、ガルベールの作品には情報収集と記録作業において彼の主観性、選択性、恣意性が働いている。作品は度重なる編集を経たきわめて構築性の高いものであり、素朴な日記などではなかったのである。

第三章「The Confort of History」では、ガルベールの作品コンセプトが考察される。ガルベールは、おそらく一一二七年三月二十二日の新しいフランドル伯就任によりいったん事態が沈静化した後、五月下旬から再びメモを取り始める九月半ばまでそれまでのメモを纏め直していたが、この間に伯の暗殺者たちの「包圍・処刑譚」から「シャルル伯の殉教譚」へと作品コンセプトを変更している。寒さで著述を中止する一一月一七日頃までに記し終え、ほぼ完成したと考えていた第九章までで、ガルベールはシャルルが有能な君主であったことを示し、なぜ神がその暗殺を認めたのかを説明しようとコンセプトを変更したのである。当時

の政治思想では、君主はすべて正義と法に基づき民を支配し公共善に仕えるべく神により置かれたものであり、たとえ君主が暴君であってもそれは神罰によつて滅ぼされるしかない。この時期の封建社会で暗殺された他の君主たちはおしなべて神の意志に忠実なまま殺害される聖人か、神罰により滅ぼされる暴君として描かれている。暗殺事件は現実には複雑な権力闘争の産物だったわけであるが、ガルベールは前者を選び、新たに付加したイントロダクションにあたる各章を中心に、殉教者⇨善き君主シヤルルと悪魔とそれに魅入られた暗殺者たち⇨悪しき奴隸エランバルド一族という構図を巧みに駆使することで事件を説明しようと試みている。暗殺者たちの運命や伯および暗殺者の家系叙述によつて膨らまされたこの「殉教譚」には、常に神の意思が底流している。ガルベールは、この歴史を通じて作用する神の統制を自らの叙述を通じて見ようとし、またブリュージュ市民を筆頭にフランドルの住民やその他キリスト教徒を想定した読者たちがそれを見るのを助けようとしたのである。

第四章「The Art of History」では、未完成な作品であるとして過去顧みられることのなかつたガルベールの修辭的達成に焦点が当てられる。「暗殺」は一見何の継ぎ目もなく生の現実をそのまま掬い取つたように見えるが、じつはこれまで考えられてきた以上に広範な改訂・編集作業が施されている。それを示す修辭的特徴が、作品中繰り返し現れる「殉教」、「宝物」、「処刑」といった循環モチーフである。これらのモチーフは、常に伯やブリュージュの聖職者、暗殺者エランバルド一族など作品の重要な登場人物たちの高貴さや愚劣さ、精神的墮落などを読者に効果的に提示

するために作品の随所に特定のキーワードと共に埋め込まれている。また、ガルベールは都市や建物、そして出来事の構造的・空間的な叙述の技にも長けており、これがわれわれに彼の叙述の透明さを錯覚させることになっている。封建儀礼の叙述においてはこれを独自に解釈・再構成し、暗殺者たちの行動をめぐる叙述においては特定の人物のみの行動に焦点を当てることによつて、叙述に臨場感や連続性、一体性をもたらすことに成功している。ガルベールは、彼が描く多くの場面において直接の目撃者ではなかつた。しかしそれらの叙述において、ガルベールはその確固たる主体性と技巧によつて、時には読者に期待され共感されうるモデルと現実の出来事を巧みに融合させつつ、空間的・時間的に破綻のない一貫した叙述を作り出すことができた。したがつて、われわれが作品に見るのは現実のフランドルではなく「ガルベールのフランドル」なのであり、その叙述の破綻のなさがわれわれに近世以降の人気をもたらした「透明性」の錯覚を起こさせているのである。

第五章「God's Scribe」でもガルベールの技術に焦点が当てられ、その独創性が吟味される。ガルベールは多くの場面で直接話法の形で登場人物たちの会話、独白、内言などを記録しており、また書簡や誓約のような比較的フォーマルな発話も多数収録している。これらは大部分フランソワ語かフランス語で発せられたはずだが、ガルベールはこれらを特定の発言のみ選択した上でラテン語に移し変え、また同時に脚色あるいは創作さえしている。これらの発話は、公的な政治的場面の叙述を盛り上げると同時に、ガルベールの共感や想像の優れた能力とともに、個人の内面を映し

その肖像を描き出すことをも可能にしている。またここには、その個人の内面描写により神の意思のもとに展開される悲劇的ドラマとしての歴史を描こうとする点で、同時代の他の著者たちと共有されるガルベールのドラマ性への志向も読み取れる。詳細な描写や発話はこのドラマの展開に効果的で、ガルベールはこれを巧妙に駆使したのだ。このガルベールの歴史神学は叙述形式の選択にも影響している。改訂の際にも採用された日記形式は単なる状況や偶然の産物ではなく、出来事がそこに埋め込まれ、それらに意味を付与するところの時間の構造を際立たせることで、そこで展開される神の摂理を明瞭に示すために採用されたものなのである。また、日記形式は中心的な物語の他に複数の物語を張り巡らせるのにも好都合で、一二世紀の物語構造が示す傾向にも適ったものだった。状況や職業習慣とともにガルベールの優れた感覚や歴史思想が組み合わさり生み出された混成的な作品が『暗殺』だったが、ガルベールの最大の独創性は彼の駆使する物語的構図や政治理念そのものではなく、日記形式でそれらを鮮やかに提示し、物語を語り、コンセプトを伝える能力にあったのだ。

第六章「Tyrant」は、執筆が再開された一二八年の叙述を中心にガルベールの暴君論を分析している。一一二八年三月第二週には執筆を再開したガルベールは、二七年夏以来の新伯ギョームの悪政と諸都市の反乱の叙述で筆を起こしており、初めから暴君の悪政と善き市民の抵抗というコンセプトのもとにこれを記していたことが窺える。このコンセプトが最も明瞭になるのは、二八年二月ガノンにおいて、市民の代弁者である封建貴族イヴァンにより直接ギョームに発せられたとされる悪政非難のスピーチであ

る。中世盛期までの政治理論では暴君は悪しき民への神罰として神により配されるのであり、いかなる反乱も正当化されえない。

しかしこうした高級な政治理論の傍らには、叙任権闘争期にザクセン貴族らが皇帝に対して唱えた、暴君となった王は自らその家臣を自身への忠誠と服従から解くことになるという一種の契約説的な見解も存在していた。イヴァンのスピーチには、貴族や商人の交流により流れ込んだこうしたザクセンの見解が確認できるが、同時に主君への抵抗を正当と見なす封建的思考や、誓約違反者への抵抗を正当化する同時代の都市コミュニケーション運動の思潮も反映されている。また、ザクセンの見解は、君主を「ナショナル」な法廷・集会に召還し退位させようという試みの点でもイヴァンのスピーチに影響を与えている。しかし、ブリュージュにいたガルベールはガンでなされたこのスピーチを直接聞いていない。そのためガルベールの記したイヴァンのスピーチは、封建領主イヴァンの元の発言、ブリュージュからの伝達過程での追加、周囲の間とこうした話題を議論していたであろうガルベールとその周辺の見解を重層的に反映したものである。その後の市民による対抗伯の選出やフランス王の介入への市民の対応の描写を含めて、ガルベールは民衆の代弁者として叙述を進めるが、これは必ずしも二七年の記述に見られた彼のテオクラシーの見解と矛盾するものではない。この時点でのガルベールの物語的構図は暴君と善き市民のそれであり、神の意思は民衆のコンセンサスを通じて働いている。この民衆の声を通じて伯は選出され、暴君は退位させられる。ガルベールはそうした出来事を観察し神の意思を描く、「神の書記」である。ここでのガルベールの思想は、いわば民主

主義的なテオクラシーとでも呼ぶことができる。しかし、その後ギョームがフランス王や高位聖職者と結び勢力を強めるなか、ガルベールは自身の判断に疑問をもち、新たなノートを取りつつその構図を変化させる。對抗伯を敗走させるなど勢いを盛り返しつつあったギョームが戦闘中急死した後に省察を加え完成されたガルベールの構図とは、暴君と悪しき市民のそれだった。シャルル伯への裏切りの舞台であり暗殺者の温床たるブリュージュの存在、そして真摯に伯を選び彼を善き伯へと導くべく助言を怠つた家臣たちの怠慢、これらの理由でフランドルは暴君に苦しまねばならなかった。しかし、悔恨したブリュージュ市民のために神は暴君を取り除いたのであり、ギョームの死にフランドルの住民は何ら罪を負ってはいない。こうして二七年の善き君主と悪しき奴隸の物語を補完すべき二八年の叙述は暴君と善き市民の構図のうちに描かれ、暴君と悪しき市民の寓話として終結する。ガルベールは一貫して同時代の出来事を同時代の用いうる政治思想で理解しようとするのであり、『暗殺』はその洗練された知的な試みの成果なのである。

最終章の「Sardans」では本書の総括がなされる。二八年春になつてからも二七年の叙述へ追加作業を行っていたガルベールだが、二八年夏の對抗伯ティエリの最終的な勝利後に全体を纏まつた一つの作品へ書き換えようとはしなかった。これはおそらく、ガルベールがこの時点でもはや自らの作品が読者をもつてはいないと感じていたからである。それは二八年六月以降の叙述に明瞭だ。もはや意欲をもたぬこの時期のガルベールの叙述は疎らであり、そこでは、暴君ではあれギョームの退位を未だ認めない神の

意思から目をそらし、對抗伯ティエリを担ぐブリュージュ市民を痛烈に非難する孤独な賢者・預言者としてのガルベールの姿が確認される。その最終部分である七月の叙述は、もはやガルベールが神のプランを理解しようとした孤独な営みに過ぎない。こうして最終的な全面改訂により完成されることのなかったこの作品には、それゆえにこそガルベールがその都度の時点で構想していた複数の重なり合った物語が透かし見えるのであり、これらの作品をその都度構想し記そうとしたガルベールの知的遍歴として『暗殺』を見ることも可能なのである。社会諸階層の境界線上で、通常の知識人とは異なる知的形成から、民衆的な声を響かせつつこの知的かつ実験的な作品を創り出したガルベールは、一二世紀前半の歴史叙述の地平を広げている。そして、多様な源泉に汲みつつ信仰を導きとして経験の現実性と隠された意味を同時に鮮やかに記録する作品を作り上げたガルベールの知的達成は、中世の歴史叙述において最高度のものであったのだ。

### III

以上本書の内容を紹介してきたが、次に評者が疑問に思う点を若干指摘してみたい。近年の歴史叙述や歴史意識の研究では、叙述に見られる過去の選択性、虚偽性、構築性がしばしば指摘される。本書の議論もまさにそうした議論と多くのものを共有しているが、この点を強調するあまりライダーにはしばしば強引な史料解釈が見られる。たとえば、本書のハイライトである第六章で詳細に分析された封建貴族イヴァンによる伯に対する悪政非難のスピーチは、イヴァンの元の発言が伝達過程やガルベールの執筆過

程で民主主義的な暴君弾劾論へと変化していくというものだった。

このように『暗殺』に多声的性質を見出す見解は、十分なコンテクトが提示できるならばたいへんに魅力的である。しかし現実にはこの場合、テクスト分析から得られる根拠は薄弱であり、比較対象としてイヴァンのスピーチ内容を詳細に伝える他の史料も存在しない。そしてイヴァンについて、スピーチ内容の伝達ルートについて、さらにはガルベル本人についてさえわれわれはほとんど何も知りえないのであってみれば、これを証明する確実な根拠は何もない。イヴァンは、はじめからそのような思想をもっていたのかも知れない。あるいは、イヴァンがガンの市民代表としてスピーチしている以上、イヴァンは市民と協議の上で民主主義的なスピーチを行い、これを伝え聞いたガルベルは何ら自己の見解を加えることなく記したのかもしれない。結局ここでできることは、次の二点だけであろう。まず、テイエリ・ダルザスを通じて、同じアルザス出身のマネゴバルト・フォン・ラウテンバッハの民主主義的政治理論がイヴァンに直接影響したのではないかと、ライダーも注釈に挙げるR・ファン・カネヘムの見解を考慮に入れること。そして、イヴァンのスピーチやその内容を知らぬ市民、あるいはイヴァン本人さえ含むかもしれない読者を想定していたガルベルは彼らが納得し共感しうる思想をこの箇所でも表明したはずであり、この時期のフランドルで封建貴族と市民の連合のもと暴君を弾劾する民主主義的な思想が存在したこと。このように、本書では『暗殺』の構築性を強調するあまり、ガルベルが語る濃密な情報を十分なコンテクトで支えきれない場合、推測の積み重ねで議論が形成されしばしば危うい印象を与え

る箇所が見られる。

また、ライダーが様々な先行研究を利用して『暗殺』のイデオロギーを一二世紀前半の思想世界のコンテクトへと矛盾なく織り込み、それによってかえって一層ガルベルの思想ではなく修辭的技巧での牙えを際立たせようとするとき、なぜそれが同時代に受入れられなかったのかという疑問も浮かび上がってくる。最終的な全面的改訂がガルベルによって施されなかったとはいえ、それが中世の歴史叙述においてさほど重要なことだったのだろうか。少なくとも二七年部分の叙述である『殉教譚』はほぼ完成していたわけで、なぜ他のシャル伯の伝記ほど受入れられなかったのかという疑問は残る。たしかにライダーは、『暗殺』の修辭的秘密を明らかにすることでその近代以降の人気の理由を提示しえた。しかしライダーは、ガルベルの有能さを強調するあまり中世的叙述の枠内におけるその修辭的巧みさをも指摘してしまつたのかを説明不能にしている。こうした修辭性の強調は、ライダーにおいては上記の構築性の強調と相補関係にあるが、構築性の高さや修辭的技法の巧みさは直接比例するものではない。こうした点でも、評者は行き過ぎを感じた。

しかし以上に連ねられた本書の問題点は、その長所によって相殺されてもいる。これまで思想的には矛盾に満ちた作品と見なされていた『暗殺』の全体に、初めて統一的な観点から説明を試みたことは高く評価できる。また、本書が言説論的な観点からの分析へと指針を提示したのは、今後のガルベル研究にとっても重要な意味をもつだろう。第四章でライダーは、封建儀礼の教科書

的事例として著名な叙述に分析を施している。ここでライダーは、他の箇所でガルベールがオマージュの語をいかなる場面で用いているかを併せて分析することで、『暗殺』におけるオマージュの表象が封建的とも市民的ともいえる多様なアクセントを響かせていることを明らかにしている。一つの表象がその内部で複数のイデオロギーによって屈折させられていると解釈できるこの分析は、バフチンの言説論を思い起こさせる。イヴァンのスピーチの分析ではその行き過ぎを批判したが、じつは評者はこうした分析に大きな可能性を感じている。そして事実、バフチンの言説論を応用する形で『暗殺』の多声的な性質を明らかにする研究も生まれてきている (cf. Jeroen Deplolige, "Genre Formation and Context. The Textualization of the murder of Charles the Good", *The Monarchy: A Crossroads of Trajectories*, at Ghent, November 7, 2003)。その綿密な読みでこれまで知られることのなかった多く

のガルベールの改訂・編纂箇所を明らかにした本書は、そうしたよりラディカルな新しい研究と共に、依然強く信じられている一二世紀前半のフランドル社会をそのまま映し出し、事実を拾い上げるのに最適な素材かつ、透明な史料としての『暗殺』像に揺さぶりをかけてゆくだろう。またライダーは、『暗殺』という密度の高いテクストを補完すべく同等に密度の高い一二世紀前半のフランドルというコンテクストを創り出そうと、同時期のフランドルに関するあらゆる先行研究を博搜している。そのため本書は、一二世紀のフランドルについての現下の研究状況を映し出す、透明な研究書でもある。こうした点から、本書は今後ガルベールと『暗殺』の研究、また『暗殺』抜きには語りえない一二世紀フランドル社会の研究を志すものにとって無視することのできな書物なのである。

(The Catholic University of America Press, Washington, D.C., 2001, pp. viii + 360.)

(日本学術振興会海外特別研究員)